

OPINION オピニオン・スライス SLICE

四季株式会社 代表取締役

吉田智誉樹さん

I 1983年11月、東京 西新宿のテント式仮設劇場で日本初演を迎えた劇団四季ミュージカル『キャッツ』。33年もの間愛され続ける猫たちの物語が、再び大阪に帰ってきました。そこで、今回のオピニオン・スライスでは、劇団四季吉田智誉樹社長にお話を伺いました。

——ミュージカル『キャッツ』が13年ぶり4度目の大阪で開幕しましたね

長らくお待ちすることになってしまい大変申し訳ありません。関西エリアには、この作品を愛してくださるお客様がたくさんいらっしゃいます。そうした皆様はこの間、東京や仙台、広島といった遠方に何度も足を運んでくださいました。その状況が改善され、ホッとしています。

——『キャッツ』が33年間愛され続ける理由は

ひとえに、この作品に強い感動があるからでしょう。この作品は、T.S.エリオットが子供向けに書いた詩集を基に、20世紀のモーツァルトと称されるアンドリュウ・ロイド＝ウェバーが音楽を付けたものです。猫に仮託はしていますが、そこに私たちは、自らの人生を重ねます。自ら生き様を高らかに謳う猫たちの姿を通して、「人生は素晴らしく、生きるに値する」と実感し、クライマックスを迎える。「明日も頑張る」というメッセージ。この点ではないかと思えます。

——『キャッツ』を上演することになった経緯は

四季は創立以来、活動の一つとして、海外の優れた舞台作品の邦訳上演を行ってきました。この『キャッツ』以前にも、同じロイド＝ウェバー作品である『ジーザス・クライスト＝スーパースター』や『エビータ』を上演しています。またブロードウェイミュージカルのヒット作『アプローズ』、『メイム』なども手掛けました。そうした流れの中で、リサーチの網に新たに引っ掛かったのが『キャッツ』でした。元々、ロイド＝ウェバーと浅利先生（浅利慶太前社長）は非常に親しく、その彼が今度T.S.エリオットの猫の詩を使ったミュージカルを作るという話を聞きつけたわけですね。浅利先生が実際に見に行ったところ、これは素晴らしいとなり、上演に向けての準備が始まりました。

——日本でも喜んでもらえるかと確信されたわけですね



Interview with Chiyoki Yoshida

猫たちの話ですから、非常に普遍的で、日本でも十分にヒットを狙えるだろうということになりました。しかし、大きな問題もあったんです。

——問題といますと

『キャッツ』以前の演劇興行界は、各社が劇場を1ヵ月ずつ交代に借りて上演していました。劇場の数に限りがありますから、皆で平等に利用しようということですね。

しかし『キャッツ』のようにスペクタクルな演出を伴う作品の場合、その設営には大変な時間を要します。したがって従来通りに劇場が1ヶ月程度しか使用できなければ、興行自体が成り立たないのです。例えば、無理やり設営を2週間、撤収に1週間半かかるとして、公演回数は4、5回程度。これでは、仮にチケット代を1枚100万円程度に値立てたとしても採算が取れません。

—100万円はちょっと高いですね(笑)

そこで発想したことが、専用劇場の建設だったのです。それも組み立てが容易いテント式の劇場でした。『キャッツ』は、都会の夜のごみ捨て場での話ですから、外部から多少の音が入ったところで、それも“味”でしょう。それでトライした。これが作品上演に向けた第一歩になりました。

—そして東京初演を迎えるわけですね

何から何まで初めてのことばかりで苦労したと聞いています。今では当たり前のことですが、コンピューターのオンラインシステムによるチケット販売は、この『キャッツ』から始まりました。「ぴあ」と共同で、券売システムを開発したのです。それ以外にも、テレビCFを用いて大量宣伝を行ったり、公演に企業スポンサーをつけたりと。しかし、それらが奏功し、日本演劇界では史上初となる1年のロングラン、48万人という破格の動員を達成したのです。日本にミュージカルのロングラン文化が花開いた瞬間だと思います。

—吉田社長が劇団四季に入社した経緯は

高校時代、先輩に誘われ演劇部に入部しました。演劇のことなど何も知らなかったし、最初は乗り気ではありませんでした。ですが、徐々にその面白さに惹かれていき、結果、大学でも演劇を続けることになりました。その時から四季

の舞台をよく観ていたんですね。他の劇団にはない魅力を感じていたのですが、特に強いカリスマ性で組織を引っ張る浅利慶太先生という存在に興味をもっていて、一度でいいからお話をさせていただきたいと思っていました。そこで、四季の最終面接まで行けばお目にかかれるのではないかと。結局、一次面接から浅利先生がいらしたわけですが(笑)。

—もともと演劇に興味があったということですか

そうですね。先の理由ともう一つ、当時ミュージカルを中心とした演劇業界というのは、発展途上のベンチャー的側面がありました。自分の人生を何かに向けるのであれば、出来上がった組織の中の一員になるよりも、新たな成長の可能性をもったベンチャー分野のほうが、ワクワクする毎日が送れるのではないかと考えたんです。

—そして今、憧れの存在であった浅利慶太前社長を引き継がれた

劇団四季は長年、浅利先生によって導かれてきました。「四季=浅利先生」と言ってもよいかもしれません。ですから、先生より、社長として組織を率いられると言われたときは大変驚き、率直に自分には任が重いと感じました。先生は、あまりにも偉大な存在です。その代わりなど務まるはずがない。とはいえ、浅利先生もご高齢です。いつまでも先生



に依存するわけにはいきません。これからは私を含め若い力を結集し、組織を維持発展させていかなくてはならない。色々悩みながら、日々を過ごしています。

——浅利前社長から具体的な言葉はありましたか

はい。一番強く心に残っている言葉は、「俳優を大切にしないといけない」ということです。「優れた俳優がいるから、四季の舞台は魅力的に輝く。この俳優という存在を、丁寧に、大事に扱わなくてはならない」と諭されました。全くそのとおりだと思っています。

——俳優を大切にするというのは

俳優たちが何を考えているのか、そのことに寄り添い、彼ら彼女らに生きがいを与えるということだと思います。もちろん人それぞれに異なるわけで、全員に通用する処方箋は存在しません。待遇面の充実もあるでしょう。しかしそれ以上に、新しい作品へのチャレンジが、俳優たちの生きがいに直結しているようです。ですから、新しい作品の定期的な創作については続けていきたいと考えています。実際に、私が社長に就任した去年はディズニーミュージカルの大作『アラジン』を手掛け、今年の12月には同じくディズニー作品である『ノートルダムの鐘』を上演します。

——経営の中で弁護士と関わることも多いかと思いますが、弁護士に対してどのような印象をお持ちですか

弊社では、何人かの弁護士の先生に法務顧問をお願いしています。大変助けていただいていますね。私どもは芝居専科なものですから、演劇界の常識でしか物を考えられないところがあるんです。その中で、弁護士の先生方のご指導は、社会・法律という非常に広い見地から、有益な知見を与えてくださる。クライアントの傍に寄り添ってくださるお仕事なんだと強く実感しています。

——今後の吉田社長の目標は

現在の四季の活動は、『キャッツ』をはじめとする海外作品の翻訳上演がメインとなっています。しかし、劇団の将来を見据えれば、これまで以上に、オリジナル作品の創作へ力を傾けなくてはならないと考えています。そして、それらを例えばアジアで上演したり、海外のプロダクションにライセンスする。いつかそのような日が来ると思います。決して簡単なことではありませんが、これは浅利先生の夢でもありました。たとえ私の代で届かなかったとしても、その種だけは用意して、次の世代にバトンタッチしたいと思っています。

——大阪弁護士会会員に向けたメッセージをお願いします

日本の演劇界はまだまだ発展途上の分野ですから、ぜひ温かくお見守りいただきたいということが一つです。そしてもう一つ。これは是非申し上げたいのですが、「一度、劇場に足を運んでいただきたい」ということ。切にお願いしたいと思っています。舞台という芸術に対して、食わず嫌いな方はまだまだ多く、初めて見て案外面白かったなと思われる方は結構いらっしゃるんです。「急に歌い出すのがどうも苦手」などと仰っていた方が、どっぷりハマったという事例も数多くありますよ(笑)。

——大阪弁護士会会員に向けたメッセージをお願いします

日本の演劇界はまだまだ発展途上の分野ですから、ぜひ温かくお見守りいただきたいということが一つです。そしてもう一つ。これは是非申し上げたいのですが、「一度、劇場に足を運んでいただきたい」ということ。切にお願いしたいと思っています。舞台という芸術に対して、食わず嫌いな方はまだまだ多く、初めて見て案外面白かったなと思われる方は結構いらっしゃるんです。「急に歌い出すのがどうも苦手」などと仰っていた方が、どっぷりハマったという事例も数多くありますよ(笑)。

——お見守りいただきたいということが一つです。そしてもう一つ。これは是非申し上げたいのですが、「一度、劇場に足を運んでいただきたい」ということ。切にお願いしたいと思っています。舞台という芸術に対して、食わず嫌いな方はまだまだ多く、初めて見て案外面白かったなと思われる方は結構いらっしゃるんです。「急に歌い出すのがどうも苦手」などと仰っていた方が、どっぷりハマったという事例も数多くありますよ(笑)。

(Interviewer:加藤 卓
Photo:高廣信之)



INFORMATION

劇団四季ミュージカル『キャッツ』

2017年8月31日公演分まで

発売中(11/18時点)

【予約方法】

SHIKI ON-LINE TICKET <http://489444.com>
劇団四季予約センター 0120-489444(10時~18時)
大阪四季劇場チケットボックス(午前11時~)他

【お問合せ】

劇団四季 関西オフィス 06-4796-6600



撮影者:堀勝志古